



【長岡の大花火の歴史】

日本一の呼び名が高い長岡の大花火には、まちの歴史や人々の暮らしが反映されています。花火の歴史に、過去から次世代へとひきつがれていく地域の資産を探ってみます。

まちと花火の歴史

夜空を豪華絢爛に彩る花火は、夏の一大イベントです。県内各地の花火大会はいずれも盛大ですが、「長岡まつり大花火大会」はその筆頭でしょう。花火の迫力、大きさ、美しさは、多くの人々を魅了してきました。日本一の大河信濃川が育む恰好のロケーションで開催される大会には、2日間で延べ80万人もの観客が全国から訪れます。

長岡の花火の歴史は、江戸時代に遡ります。長岡藩10代藩主牧野忠雅のとき、川越移封の命令が中止になったのを祝って天保12年（1841）にあげたのが始まりといわれ、本格的になったのは、明治時代になってからです。明治12年の9月に、千手町八幡神社の祭礼で350発の花火が打ち上げられたのが長岡初の花火大会であり、このとき花火の費用を出したのは、長岡の花柳界と記録されています。

時が経つにつれて花火の技術は格段に向上し、大玉や仕掛け花火、水中花火も見られるようになってきました。明治の終わりには信濃川の堤防沿いに「棧敷」がつくられるなど、現在の花火大会の基礎が出来上がります。

昭和初期になるころには、国内有数の大会として全国的に知られるようになり、毎年多くの見物客がやってくる盛況ぶりでした。しかし、花火は世の中が平和でなければ楽しめるものではなく、日本が戦争へと傾いていった昭和13年になると、大会はやむなく中止に追い込まれます。

長岡の花火が復活したのは、戦争が終わって間もなくの昭和22年です。昭和20年8月1日に長岡のまちを襲った大空襲でまちはことごとく焼き尽くされ、多くの被災者が出ましたが、その慰霊と、まちの復興という願いを込めて「長岡戦災復興祭」として再開されました。このお祭りは昭和26年に「長岡まつり」と改められて、同年、正三尺玉の打ち上げも再開されています。

まちの復興、経済の発展にともなって、花火大会の規模も大きくなっていきます。

昭和61年には、市制80周年を記念して誕生した新顔の花火が登場しました。市民が打ち上げ費用を賛助する、市民花火です。長岡大花火を愛する市民だけでなく、市外の人たちも参加できる仕組みになっています。

のちに「米百俵花火」と名づけられたこの花火は、市制施行年数に合わせた尺玉を、夜空のキャンパス一杯に*ワイドスクリーン方式で連続して打ち上げます。最初の年には80周年にかけて80発を打ち上げ、毎年1発ずつ増やしていった平成18年の市制100周年目には、記念すべき100発を豪快に打ち上げる予定です。

また、平成14年12月には日本初の花火シアター「まちなか花火ミュージアム」がながおか市民センター内にオープンし、平成15年8月には全国屈指の花火開催団体が集う「全国花火サミット」なども開催されました。

花火に思いを託したり、花火を通じて交流を深めていく。

花火は、人々がまちや未来に託して上げる大きな夢のひとつです。



*ワイドスクリーン方式=花火の打ち上げ場所を複数地点ならべ、約1秒間隔で10号玉が素早く打ち上がるようにする打ち上げ方式